

## 楽曲解説

今回の楽曲解説も、長文となってしまいましたが、ご容赦頂ければ幸いです。

### 1. 交響詩第3番『前奏曲』 (リスト)

リスト (Franz Liszt : 1811~1886) は、ハンガリー出身の作曲家、ピアニストである。

作曲家としてのリストの作品といえば、「愛の夢」、「ハンガリー狂詩曲」などオリジナル作品も秀逸だが、「ラ・カンパネッラ」、「献呈」などの編曲作品においては、原曲よりも演奏機会に恵まれているものも多い。また、ベートーヴェンの交響曲の全曲をピアノ独奏に編曲するという偉業もある。

ピアニストとしてのリストは、少年のころから生業として活躍していたが、20歳の時にパガニーニ (イタリア出身の超絶技巧で名をはせたヴァイオリニスト) の演奏に触れ「自分もピアノのパガニーニになる！」との一大決心をして、高度な演奏技術の習得に奮起したそうである。そして、その演奏は単なる高度なテクニックの披露だけではなく、美しくも華やかなもので、その風貌と相まってアイドル的な存在となった。

そんなリストには、音楽界に残した功績がいくつもある。その一つが「リサイタルの創設」である。それまでのピアニストの演奏会といえば、他の演奏者との共同開催、“おさらい会”や“発表会”的なものであったが、ピアニストが一人ですべての曲を演奏するスタイルを始めたのがリストであった。その他、弟子たちへの指導を無償で行ったり、チャリティーコンサートを開催したり、他の作曲家への支援をしたりなど「人格者」の一面もあった。そして「交響詩の確立」もリストの功業となっている。“交響詩”とは、詩や絵画などの内容を自由な形式で表現するもので、通常、単一楽章で構成されている。本日演奏する『前奏曲』はリストが作曲した13曲の交響詩の第3曲目である。

この“前奏曲”が題材とした詩はラマルティーヌ (フランスの詩人) が1823年に発表した『新・詩的瞑想集』の一説で、その要約は次のとおりである。

私たちの人生は、死への“一連の前奏曲 (une série de Préludes)”に過ぎない。  
愛は輝かしい光だ。しかし、その素晴らしい幻想は嵐によって中断される。  
そうした激動が去ると、傷ついた魂は田園生活の静けさの中で安らぐ。  
そして、「ラッパが警報を鳴らす」とき、人は戦いの地へ赴く。  
自分自身を認識し、活力を回復するために。

この“一連の”を表現するために標題を、単数の“Le(ル) Prélude”ではなく、複数の“Les(レ) Préludes”としている。つまり、標題の「前奏曲」は、“幕前に演奏される導入曲”といった曲の分類のことではなく、“人生”のことなのである。

曲は4部構成となっている。なお、ご紹介するそれぞれの主題に係る標題については筆者が独自に命名したものであることを申し添える。

## 第1部「人生、死への前奏曲」

弦のピッツィカートに続けて“人生の主題”が提示される。



この主題が反復進行（同じフレーズを音の高さを変えて繰り返す技法）的に展開されると、新たな旋律が次々と登場する。それらはいずれも「人生の主題」のモチーフ（第1小節目）を変奏・展開したもので“一連の前奏曲”を人生に関連付けているように思われる。

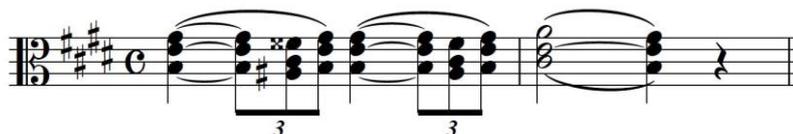
“前奏曲1” 戦いの主題



“前奏曲2” 愛の主題



“前奏曲3” 安らぎの主題



## 第2部「嵐による中断」

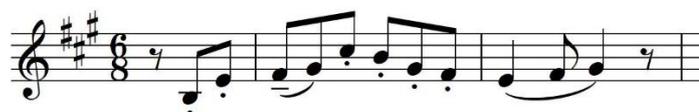
チェロが不安げに“嵐の主題”を提示する。



この主題も“人生の主題”のモチーフを変奏・展開したものであり、それが激しさを伴ってさらに展開される。その激動が鎮まりをみせるとオーボエが、続けて第1ヴァイオリンが“愛の主題（前奏曲2）”を表現する。

## 第3部「田園生活」

ハープの下行音形に誘われてホルンが牧歌的な“田園生活の主題”を演奏する。



この主題が“安らぎの主題（前奏曲3）”とともに展開され次第に高揚してゆく。

#### 第4部「戦いの地へ」

ヴァイオリンの下行上行の動きに乗せてラッパ（ホルン及びトランペット）がファンファーレ風に“愛の主題（前奏曲2）”を吹き上げる。そして“安らぎの主題（前奏曲3）”を基にして行進曲風に展開すると、“戦いの主題（前奏曲1）”を再現する終結部に移行して全体を締めくくる。

## 2. 交響詩『ドン・ファン』 作品20 （R・シュトラウス）

R・シュトラウス（Richard Strauss：1864～1949）は、ドイツ出身の作曲家、指揮者である。彼の作品は劇的なものと認知されているが、初期の作風は、シューマンなどの影響を受けたドイツの伝統的なものであった。その後、ワーグナーの影響を受けると、革新的なものとなり、その出世作というべきものがこの交響詩『ドン・ファン』である。

題名の「ドン・ファン」は日本でも紀州にいらっしやったが、スペインの伝説上の人物のことであり、“放蕩者”として多くの芸術作品に登場する。モーツァルトも歌劇として『ドン・ジョヴァンニ』を作曲している。この“ジョヴァンニ（Giovanni）”はファン（Juan）のイタリア語表記である。ついでに申し添えると、ドイツ語表記ではヨハネス（Johannes）、英語圏ではジョン（John）となり、日本名にするならば“じゅん（潤、順など）”といったところであろうか。また、“Don”については、男性の名前に付加する尊称で、日本語で言うところの“さん”のようなものである（姓に付けるものは“セニョール”）。

さて、話を戻すと、モーツァルトなどが題材としたものはモリエール（フランスの劇作家）が17世紀後半に発表した戯曲『ドン・ファン またの名を石像の宴』であるが、R・シュトラウスはレーナウ（オーストリアの詩人）が19世紀前半に作った抒情詩『ドン・ファン』を基にしている。モリエールの戯曲では、主人公が次々と女性を口説く中で、以前主人公との決闘の際に殺傷された騎士の墓前で、主人公がふざけて騎士（墓石）を酒席に誘ったところ、その騎士が石像となって宴会場に現れて、主人公を地獄に引きずり込むという、天に向かって唾を吐くような生活をしているところなるといった内容だが、レーナウの作品はおむね次のようなものである。

悦楽の嵐の中を進み、“最後の”女性の唇にキスをして死にたい。  
美しい女性の咲くすべてのところでは膝まずき、一時の勝利を得たい。  
はい！情熱は毎回新しいものである。  
理想とする美を持つ愛は唯一だ。  
私を駆り立てたのは“美の嵐”だが、それも今や治まり、静けさが残る。  
天からの稲妻により私の欲望は死せり、辺りは冷たく暗くなった。

つまり、よく知られたプレイボーイが自業自得で死に至るものではなく、理想の女性を求め続けるも“最後の女性”に出会うことなく力尽きた絶望死がレーナウのエンディングとなっている。

さて、曲の構成であるが、リストの交響詩 (*Symphonische Dichtung*) が題材とした詩の内容に沿った構成をとっているのに対し、R・シュトラウスの交響詩 (*Tondichtung*) は、詩から受けた印象を音 (Ton) にしたものである。なお、この曲についても、主題に係る標題については筆者が独自に命名したものである。

冒頭は、“悦楽の嵐”を提示する。



続いて、“ドン・ファン”の主題が現れる (ヴァイオリン)。



ドン・ファンが美しい女性を求めてさまよう印象の音楽が鎮まると、“女性”の主題が独奏ヴァイオリンに現れる。



続けて、この詩の重要なテーマである“美しい女性”の主題がクラリネットとホルンによって演奏される (この主題には、上記の“女性の主題”が含まれている)。



再び、“悦楽の嵐”の主題の断片と“ドン・ファン”の主題が戻ったのち、ヴィオラとチェロにより“ひざまずき (求愛)”の主題が現れる。



フルートのなだめるような音形のあと、形式的には「中間部」に移行する。ここでは、“求愛の主題”を伴奏に従え、オーボエが“理想の美”の旋律を奏でる。



ホルンが奏でる荘厳な主題は、理想の美を追い求める“情熱”を表しているのだろうか。



音楽が壮大に展開し高揚すると、“天からの稲妻”がティンパニーの連打等によって表現され、手に入れることのできなかつた“美しい女性”への儂いあこがれも表現される。

その後、形式的には「再現部」に移行するが、ここは、自分を駆り立てた“美の嵐”への回想ともとれる。急かされつつ高揚すると全休止となり、ここからが「終結部」となる。

絶望により冷たく暗く死を迎えるさまを表現していると言えよう。

なお、レーナウの作品には『ファウスト』という叙事詩があり、リストがその一場面を取り上げてメフィスト・ワルツを作曲している。

### 3. 交響曲第7番 イ長調 作品92 (ベートーヴェン)

ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven : 1770~1827) については、よくご存じのことと思うので詳細は省略する(過去の楽曲解説を参考にさせていただきたい)が、ハイリゲンシュタットの遺書がむしろ“やる気スイッチ”となって迎えた「傑作の森」も終盤となった1812年に第7交響曲は完成された。傑作の森の仲間たちである『英雄』にはその第4楽章に変奏形式を取り入れたり、『運命』では楽器編成にピッコロやトロンボーンを加えたり、『田園』では全体を5楽章構成とするなど、革新的アプローチを行ってきた作曲者は、この第7交響曲では“律動主題”ということを試みた。これは主題の基礎となっている律動(リズム。以下「主題律動」という。)が楽章全体を支配するもので、統一感を生み、また、聴く者に高揚感を抱かせる効果を発揮している。

第1楽章 Poco sostenuto (4分の4拍子) — Vivace イ長調 8分の6拍子

この楽章は、次のようなソナタ形式となっている。



序奏は、6 2小節(約4分間)と長いですが、この中には反復進行(同じフレーズを音程を順次変えて繰り返し演奏する)の技法が使われている。途中に現れる優美な旋律の第2小節目にはこの楽章の主題律動が暗示されている。



その後、木管楽器とヴァイオリンによって主題律動の模索が行われる。

提示部(約2分間半)では、まず律動を確定してから第一主題を提示する。



強奏による主題の確保と展開（経過句）ののち、躍動が停止しそうになってから最弱音で登場する第二主題も基本的な律動は第一主題と変わらない。



その後、展開部（約2分間）、再現部（約2分間半）と進み、全休止のあと、低音弦楽器による主題律動の反復に乗せてヴァイオリンが第2主題のモチーフを反復進行で輪唱する終結部（コーダ）に移行する。

なお、経過句（提示部における第一主題と第二主題の橋渡し部分）の後半に登場する副旋律を第二主題とする専門家も多い。



## 第2楽章 Allegretto イ短調 4分の2拍子

この楽章は、「第一部」－「第二部」－「第三部」－「終結部」の構成となっている。第一部（約3分間）の主題の律動もこの楽章を支配している。



その後、美しい対旋律がヴィオラとチェロに現れる。この、主題を対旋律とともに展開していく様は、第九交響曲の第4楽章の提示部（歓喜の歌）に通じるものがある。

第二部（イ長調、約1分間半）の主題は、低音弦楽器のピッツィカートによる主題律動の反復に乗せて現れる。



3連符の下降音形に続けて2発の連打が断定的に弦楽器→金管・打楽器→木管楽器に受け渡されると、“再現部”とも言える第三部（約3分間）に移行する。

途中から現れるフガート（交響曲などの楽章の途中で同じ旋律を異なるパートで順次繰り返す技法）のあと第一部主題が強奏され、その後第二部主題が再現される。

続けてこの楽章の主題律動が木管楽器により2回強奏されると、終結部に静かに移行する。ここでは、第一部主題を各セクションが2小節ずつ分担するという、アイドルグループのソロ歌唱によくある“歌割り”の手法がとられている。

### 第3楽章 Presto ヘ長調 4分の3拍子

この楽章の構成は、次のような変則的な三部形式となっている。



通常の三部形式は、「主部」－「中間部」－「主部再現部」となっているのですが、かなり長大な楽章となる（約10分間）。なお、ニ長調に転じた中間部の主題は次のとおりである。



### 第4楽章 Allegro con brio イ長調 4分の2拍子

第1楽章と同様にソナタ形式をとっているが、対照的に序奏は短く（4小節）、この楽章の主題律動のみを提示し、提示部第一主題を導き出す。



2拍子の音楽というものは1拍目が強く2拍目が弱いというのが常套であるが、あえて弱拍である第2拍目にスフォルツァンド（sf: その音を強く）を配置しており、後世の音楽ジャンルにおけるリズム（バックビート）の出現を預言しているようである。

なお、経過句における新たな旋律及び第二主題はそれぞれ次のとおりである。



第一主題の反復を柱とした展開部（約1分間半）を経て、序奏の“主題律動”が再登場すると、再現部（約1分間半）に移行する。

再び序奏の“主題律動”が現れ、それが繰り返されると、110小節を超える壮大な終結部（約2分間）となる。ここでは、第一主題のモチーフの受け渡しが続く。途中から低音弦楽器のバツ・オスティナート（通奏低音が同じ音形を繰り返す技法）とともに反復進行されるなどして高揚し、挙句には、おそらく音楽史上初めて登場するフォルティッシッシモ（fff）となり、律動をテーマとしたこの交響曲を華やかに締めくくる。

以上